

第 分科会(中学校学級活動部会)

よりよい生活や活動づくりに主体的に参画し、 共に高め合う人間関係を形成する学級活動

1 研究内容

- (1) よりよい生活づくりへ向けて主体的に問題を解決していく学級活動はどうあるとよいか。
- (2) 集団活動の魅力を実感し、互いのよさを認め合い、発揮し合えるような学級活動はどうあるとよいか。

2 提言の要旨

よりよい生活や活動づくりに主体的に参画し、
共に高め合う人間関係を形成する学級活動
雄武町立雄武中学校 北川 大

提言内容

雄武町はオホーツク管内の最北端に位置し、漁業と酪農を主要産業としている。本校は、その雄武町唯一の中学校で、生徒数120名で、生徒数は減少傾向にある。多くの生徒は明るく純朴であり、進んでよいものを取り入れようとする開明的な姿勢が見られる。一方、幼少時からの固着した人間関係などにより、リーダーが育ちづらいという課題がある。

本年度は1年生の担任として、学級や学校の生活づくりを通し、生徒の主体性を伸ばすとともに、よりよい人間関係を築くことを目指した実践を進めてきた。その中で、特に大切にしてきたことは「他を認め、受け入れることができること。相手の立場になって考えられること。多角的・多面的に物事をとらえることができること。」「責任感をもって事象に当たることができること。」の2点である。

また、担任として個人や集団の特性をしっかりと理解し、保護者、学年、教科担任などの協力を得ながら、適切な指導と支援を行っていく必要があることも念頭に置いて取り組んできた。

(1) 学級活動の充実を目指すこと

- 「みんなで取り組めばできる」を体験
- ア 達成感、成就感を集団で体感させる
- イ 楽しさを味わわせ、集団の持つ力の大きさと、集団の必要性を実感させる
- 自己有用感

例 2週間お疲れ様パーリー～教育実習生
とのお別れ会の企画

「自分たちで決めたことは守る」を実践

- ア 主体性、自律性を身に付けさせる
- イ 責任感、規範意識を高める
- ウ トラブルの発生を成長するためのチャンスと捉えさせる

問題発生時の教師側の姿勢

- ア 問題発生時は生徒に寄り添う
- イ 共感し、期待し、安心させ、要求する
- ウ 問題を教師が解決するのではなく、生徒に考えさせ、解決に向かわせる～多面的・多角的に考えさせるよう配慮

(2) 実践活動へつながる学級会を目指して

議長への事前指導

意義、目的、マナーやルールの指導

提案理由と目的

合意形成するための過程

- ア 「討論」「討議」ではなくて「議論」～「ミニ発言用紙」の利用、「知恵を出し合って折り合いを見出す」「折り合いをつけるための5ステップ」

ステップ1「いろいろな意見があることを知る」

ステップ2「集団決定の重さを理解する」

ステップ3「みんなも自分もいい方法を見つける」

ステップ4「決定には気持ちよく従う」

ステップ5「心遣いをしながら活動する」
(杉田 洋 著「よりよい人間関係を築く特別活動」より)

イ 「私は」を主語にした発言

ウ 自分の考えと比較する

最近、学級全員で議論を進めることが楽しくなっている様子が見られるようになった。今後も、「他を認め受け入れる」「責任感をもつ」ことが身に付くよう取り組んでいきたい。

3 研究討議

<討議の柱1>

よりよい生活づくりへ向けて主体的に問題を解決していく学級活動はどうあるとよいか。

中学1年生は活動的である。学級活動の内容は活動内容(1)「学級や学校の集団づくり」、(2)「適応と成長及び健康安全」、(3)「学業と進路」からなっているが、特に内容(1)を大切に展開すると、中学1年生のよさを生かすことができる。

「生徒の主体性」を考える時、「放任」になっていないかを点検する必要がある。生徒に任せると言って、実施が不可能だったり、問題をはらんだ結論に到達したりしたからと言って、その段階で教師が止めていては信頼が損なわれる。話し合いをさせる時には、生徒に委ねてよい範囲に収まる議題となっているか、十分吟味しておく必要がある。

小規模校(1学年1学級～10名程度)では、人間関係の固定化や、委員会活動・係活動・当番活動等がいくつにも重なって、活動に疲れが見えることがある。そんな中で、「よりよい生活に向けて活動を」と働きかけても、「よりよいって何?」という反応が返ってくることもあり、悩んでいる。

委員会活動・係活動・当番活動にはそれぞれ異なるねらいがある。特に、当番活動は、それがなければ学級生活を維持できない側面があるので、活動が順調でなければ問題も見えやすいであろう。そこを子どもに把握させ、解決させていくよう教師が働きかけることが大切である。問題意識を持たせる教師の工夫が重要である。

どんな学級にも学級目標がある。それが、「最終的に自分たちが目指す姿」であれば、そこに近づいているかどうかを定期的に確認する場を設ければ、それがよりよい生活づくりの話し合いになるであろう。もし、学級目標が「こんなことにいつも気をつけよう」というスローガンのようなものであれば、それがなされているかどうかを定期的に確認する場を設ければよい。

生徒会組織とのつながりがあり、学年でも揃えている学級組織であるが、後期の時期になると活動が停滞する係があって、困っている。

自分自身も、この係は必要なのかと思っている面もある。

教師が必要を疑う組織であれば、学校全体で改善に向けて論議する必要がある。

係活動には、集団を維持させていく活動の他に、自分たちで創造していく活動もある。文化系の掲示物作成等は後者に位置する。前期のように、学級に必要な掲示物を揃える段階では活動は旺盛であろうが、後期になると停滞するという悩みはよく聞く。現在の学級生活の見直しをさせ、そこで明らかになった課題の解決に向けて各係で取り組むようにすると、例えば文化系は呼びかけポスターや点検結果の掲示物を作るなどの活動を作り出す事等が可能になる。

<討議の柱2>

集団活動の魅力を実感し、互いのよさを認め合い、発揮し合えるような学級活動はどうあるとよいか。

互いの個性を尊重し合って役割を分担し、そこで意味のある活動・喜びをもって取り組める活動を展開することが大切である。そのためには、教師の創造性が必要になる。

支持的風土・秩序ある集団にしていく事が大切である。「ありがとう」「ごめん」「おいで」そんな言葉が行き交う集団にする必要がある。

4 指導助言

「話し合い活動の充実」「体験の充実」「道徳的実践の充実」「生徒指導の機能」を大切に学級活動を進めていく必要がある。その中で、考える力を養い、集団決定・自己決定できるように育てていく必要がある。

教師と生徒が互いにイメージでき、達成目標とできるような学級目標を立て、その実現に向けて主体的に問題解決をさせる中で様々な資質・能力を伸ばすことが大切である。子ども一人一人が大切にされるよう課題を一步步解決させる「特活」が重要である。

5 今後の課題

成果を挙げるためには、教師のねらい・見通し・働きかけが不可欠であることが再確認された。生徒指導の機能が高まる道徳的实践となっているかという視点で見直す必要がある。